扁桃周囲膿瘍の起炎菌と薬物感受性，抗菌化学療法に関する検討

島　田　貴　信　　上　條　　篤　　増　山　敬　祐
山梨大学大学院医学工学総合研究部　耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座

目的と方法：当院にて切開排膿術を行った扁桃周囲膿瘍18例および頸部膿瘍17例を対象に，起炎菌，使用抗菌薬，薬剤感受性について検討を行った．

結　　果：扁桃周囲膿瘍は48株，頸部膿瘍は20株の菌が検出され，それぞれ65.6%，75%（常在菌を除く）が嫌気性菌であった．薬剤感受性試験では好気性菌，嫌気性菌ともにPIPCおよびIPM/CSが良好な感受性を示した．嫌気性菌におけるCLDM耐性化は１割程度であった．切開排膿前における高感受性薬物投与の有無と膿汁中菌消失の間に相関はなかった．

考　　察：頭頸部膿瘍の起炎菌は嫌気性菌が多く，薬剤感受性の面からもPIPC＋CLDM併用またはCarbapenemの投与が奏効しやすいと予測された．しかし，膿瘍形成例では抗菌薬の移行が不十分なため膿汁中の菌を消失にいたらせる事が困難であることが今回の検討で示され，切開排膿が早期改善の重要な因子であることが示された．